

## 慣用表現学習上の問題点について

ー中国語の慣用表現を受けての日本語「産出困難」も視野にいれてー

Issue of learning proverbs, idioms and idiomatic expressions:

Difficulty of producing Japanese proverbs which are influenced by Chinese proverbs

劉 志偉\*

LIU Zhiwei

本稿では、まず筆者の学習メモを手がかりに、日本語の慣用表現を学習する際の問題点を理解と産出の両面から考察を行った。特に、産出に関しては「読めない」問題にも焦点をあてた。そして、従来の研究では看過されてきた、中国語を母語とする学習者が中国語の慣用表現の影響を受け、直訳または意識した日本語が伝わらないというコミュニケーション上の重要な問題点を取り上げた。最後は「字義」「比喻」「文化」といったタイプに沿って、この問題を解消するための提案を行った。

キーワード： 慣用表現 産出困難 字義 比喻 文化

### はじめに

日本語の慣用表現について四字熟語を例にとっても以下のようなさまざまな学習上の問題点があることがわかる。たとえば、中国語母語話者が「当意即妙」「妄言多謝」を見て文字の情報だけでは意味の推測（理解）がうまくいかない。また、「朝令暮改」「因果応報」は中国語の“朝令夕改”“因果报应”と似てはいるが、完全一致ではない。中国語母語話者が中国語のそれを意識しすぎると正確に産出できない可能性がある。さらに中国語由来の「捲土重来（卷土重来）」「臥薪嘗胆（卧薪尝胆）」について理解に関しては全く問題がないが、日本語で正しく読める学習者は少ない。当然のことながら、日本語の慣用表現は四字熟語だけではない。その習得に関してはなお多くの課題がある。

そして、中国語の慣用表現の影響を受けて、それに対応する日本語の慣用表現の有無を問わず、日本語に直訳または意識しても日本語母語話者に伝わらないというような経験は中国語を母語とする学習者なら誰しもしているであろうが<sup>1</sup>、この点に関する研究は極めて手薄である。

本稿では、筆者の日本語学習メモにあった慣用表現のデータを手がかりに、上級以上でニア・ネイティブレベルを目指す学習者の慣用表現の学習について考察するとしたい。

\* りゅう・しい、埼玉大学大学院人文社会科学部研究科准教授、日本語教育学

<sup>1</sup> 埼玉大学人文社会科学部研究科大学院生牛雨薇氏による「産出障害」という用語を部分改変して「産出困難」に改めた。

## 1. 筆者の日本語学習メモについて

ここでいう「学習メモ」とは、中国語母語話者（男性）である筆者が大学院進学のために来日した2003年から就職後の2020年までの間（現在も進行中である）、日常生活で出会った日本語の表現を学習のために記したものである。2013年までは紙媒体の手帳に記入していたが、その後は携帯のメモ帳を用いている。このメモは筆者が大学、アルバイト先、職場などで知人から受けたインプットだけでなく、TV や書籍類、広告や公共放送などあらゆる媒体を通して受けたインプットの中で、気になった表現を幅広く収集したものである。表1のように、大きく「語彙」「文法」「問題意識」の3つに分けられ、全体は延べ3,319項目に上り、このうち「語彙」は延べ2,618語（異なり2,297語）である<sup>2</sup>。

表1 筆者の学習メモの全体像

年	語彙	文法	問題意識	計
2003	15	4	0	19
2004	212	62	15	289
2005	80	22	12	114
2006	397	24	0	421
2007	0	2	3	5
2008	120	35	2	157
2009	14	6	14	34
2010	11	29	5	45
2011	1	33	1	35
2012	0	5	9	14
2013	0	13	3	16
2014	483	135	14	632
2015	267	40	24	331
2016	189	35	5	229
2017	104	26	4	134
2018	222	44	16	282
2019	333	29	14	376
2020	170	13	3	186
計	2618	557	144	3319

<sup>2</sup> 2011年に山内博之先生（実践女子大学）の研究プロジェクトに参加させて頂き、学習者の視点から語彙と文法のシラバスを考える機会を賜ったことがきっかけで、日常生活などで「この表現は昔わからなかった」などふと思い出したものについてもメモを取るよう心がけている。そのため、2014年以降メモの数が増加する傾向にある。

このうち、「語彙」の2618語にタグ付け作業を行ったのが表2である。

表2 学習メモにおける「語彙」のタグづけ一覧

ポイント or 領域	計	社会領域	284
アクセント	196	人文領域	52
うろ覚え	171	生活領域	257
うろ覚えカタカナ	43	難習カタカナ	304
カタカナ表記	137	難習漢語	327
言語間のずれ	86	難習和語	571
誤推測	16	死語	6
準標準語	7	不明	18
書き言葉	99	計	2618
自然領域	44		

## 2. 日本語の慣用表現を学習する際の問題点について

表2にある「難習漢語」と「難習和語」に対してそれぞれ下位区分をした表3と表4を確認してもわかるように、中国語母語話者が慣用表現の学習に関心が高いこと、そして慣用表現の学習に問題点があること、の2点がわかる。

表3 「難習漢語」における慣用表現

	読めない	ヒアリング	推測不可	産出難	慣用表現	総計
2003	1					1
2004	3	2				5
2006	10		1	1	13	25
2008	2			1	2	5
2014	21		4		7	32
2015	25		1	1	5	32
2016	22		7	2	1	32
2017	23		6	2	2	33
2018	46		6	1	7	60
2019	44		16	2	6	68
2020	21		8	2	3	34
総計	218	2	49	12	46	327

表4 「難習和語」における慣用表現

	未習	オノマトペ	通時的視点	読めない	一字読み	推測不可	漢字有効	産出難	慣用句ー語	慣用句ーフレーズ	慣用句ー定型句	慣用句	総計
2003								1					1
2004	2	1	2	1		1		2		1	1		11
2006	2		1	8	2	3		6	3	4	1	2	32
2008		1		2	2	4		2		1	1	1	14
2009										2			2
2010			1					1			1		3
2014	17	1	4	15	4	17	1	21	3	9	3		95
2015	7		1	10	2	16	6	10		4	6	2	64
2016	6	2		11	2	8		10	4	2	3	1	49
2017	3			11	2	1	2	1	2	1	1		24
2018	12			29	11	6		6		6	4	2	76
2019	24		4	32	2	13	5	11	2	13	13	16	135
2020	9		1	10	5	17	2	6	2	6	5	2	65
総計	82	5	14	129	32	86	16	77	16	49	39	26	571

具体的には、「難習漢語」における慣用表現は四字熟語が中心であるのに対して、「難習和語」の慣用表現はさまざまな下位タイプに分けられる。そもそも「慣用表現」の範囲<sup>3</sup>、ひいては定義を定めること自体が難しい。たとえば、和語の場合、「ゴマをする」「水入らず」「根掘り葉掘り」「短気は損気」「ぐうの音も出ない」「三つ子の魂百まで」「背に腹は代えられない」など慣用的に使われる日本語らしい言い方があるほか、中国語由来の「火に油を注ぐ（火上加油）<sup>4</sup>」「水を得た魚（如鱼得水）」に加え、海外の名言格言「時は金なり（时间就是金钱）」（ベンジャミン・フランクリン）も見られる。しかし、学習者がこれらを区分したうえで使用しているというわけではない。この点に鑑みて、本稿ではいわゆる定型句のほか、「二つ返事」「三つ巴」「雀の涙」「高嶺の花」「言質を取る」「大口をたたく」「大目玉を食らう」のような汎用性の高い語やフレーズの一部も慣用表現と見なす。以下、理解面と産出面とに分け、それぞれにおける漢語と和語の慣用表現の学習について考察する。

## 2-1 理解面

漢字の文字情報（以下、字義）を手がかりに、中国語母語話者の学習者にとって意味の推測が可能な慣用表現も少なくない。

漢語の場合、中国語の慣用表現に対応するものの学習は、中国語母語話者が特に有利とされる。

<sup>3</sup> 中国語由来で「螻蛄が斧を以て隆車に向かう（螻蛄挡车）」のような日本語母語話者でも知らないものも多い。

<sup>4</sup> 丸括弧内は対照言語である。この場合は中国語であるが、以下、中国語に対して丸括弧内に対照言語である日本語を示す場合もある。

中には、「徒手空拳（徒手空拳）／捲土重来（卷土重来）／一進一退（一进一退）／傍若無人（旁若無人）／起死回生（起死回生）」のような完全対応のものと、「本末転倒（本末颠倒）／臨機応変（随机应变）／良妻賢母（贤妻良母）／青天霹靂（晴天霹雳）／七転八起（七颠八倒）／老若男女（男女老少）／羊頭狗肉（挂羊头卖狗肉）／美人薄命・佳人薄命（红颜薄命）」のような部分対応とに分けられる。また、中国語由来でなくても、字義を利用して意味の推測が可能なものとして「威風堂々／悠々自適／紆余曲折／自信満々／心機一転／相思相愛／不要不急／四苦八苦／正真正銘／乾燥無味／自画自賛／中途半端／有言実行」などが挙げられる<sup>5</sup>。また、比喻の意が込められた「一石二鳥（一箭双雕）／玉石混淆（鱼目混珠）」なども、中国語の慣用表現と大きな相違を見せるものの、字義を頼りにその意味を推測することは可能であろう。

これに対し、「火に油を注ぐ（火上加油）／水を得た魚（如鱼得水）／漁夫の利（渔夫得利）／光陰矢の如し（光阴似箭）／対岸の火事（隔岸观火）／（時は金なり（时间就是金钱）／失敗は成功の基（失败乃成功之母）」のような日中同根と区分される和語の場合、ずれが多少あってもさほど問題にならない。また、和語であっても漢字の字義情報が意味の推測に役立つものもある。たとえば、「一難去ってまた一難／苦あれば楽あり／短気は損気／終わりよければ総てよし／当たって砕けろ／至れり尽くせり<sup>6</sup>」などが例として挙げられる。字義か派生義かの判定は難しいが、「他人の不幸は蜜の味」「目に入れても痛くない」のような共感できる比喩的な表現であれば、意味の推測も可能である。ほかに「木を見て森を見ず／火のない所に煙は立たぬ／傷口に塩／喉に刺さった小骨のように／臭い物に蓋をする／火事場泥棒／焼け石に水／火中の栗を拾う／山あり谷あり／元も子もない／根も葉もない／根掘り葉掘り／後ろ髪を引かれる／足元を掬われる／宝の持ち腐れ／両雄並び立たず／捨てる神あれば拾う神あり／虎の尾を踏む」などを挙げることができる。

一方、字義を利用して理解できない場合も少なくない。以下、学習メモにあった実例をもとに理解面の問題点について考察を行う。

## 2-1-1 ヒアリング

### a. 漢語

会話の中で聞き取れなかったものとして以下の漢語の慣用表現が学習メモに記されている。

初志貫徹（2006） 全身全霊（2006） 創意工夫（2006） 風林火山（2006） 平身低頭（2006）  
意気軒昂（2015） 臨機応変（2014） 他言無用（2016） 玉石混淆（2018） 心頭滅却（2020）

その多くは中国語に存在せず、筆者がメモを取る時点において未習であったものがほとんどである。ただし、中には「臨機応変」「玉石混淆」のような、中国語「随机应变」「鱼目混珠」と対応しつつも、細かいずれのあるものも含まれる。

### b. 和語

ヒアリングがうまくいかなかった和語の慣用表現を確認すると、複数のタイプに分けられること

<sup>5</sup> 無論個人差が認められ、量的検証が必要である。

<sup>6</sup> 古典日本語の要素が含まれているという難しさはある。

がわかる。

まず、慣用表現を構成する要素自体は既習語であるが、全体として聞き取れなかったものである。

フレーズ 言質を取る (2008) 大目玉を食らう (2019) してやられる (2019)

定型句 踏んだり蹴ったり (2008) 寄って集って (2010)

慣用句 喉元過ぎれば熱さを忘れる (2019)

また、慣用表現の中に未習の要素（下線部）が含まれると、ヒアリングの難易度が高まり、聞き取れない結果につながったものとして以下のものが挙げられる。

語 三つ巴 (2006) くわばらくわばら (2016)

フレーズ 牙をむく (2006) 名が轟く (2006) 口さがない (2014) まちがない (2014)  
にべもない (2015、2017) お日柄がいい (2018) おじゃんになる (2020) びっこを引く  
(2020) マウントを取る (2020)

定型句 腸で煮えくり返る (2014) これ見よがしに (2017、2019) ぐうの音も出ない (2018)  
とどのつまり (2019)

慣用句 臍も糸瓜もない (2008) けんもほろろ (2019)

このほか、「病膏肓に入る (2006)」のような中国語“病入膏肓”に由来する慣用表現であっても全く理解できなかった例もある。

## 2-1-2 推測不可

### a. 漢語

未習の慣用表現に遭遇する際に、漢字などを手がかりに意味を推測してもうまいいかない場合がある。筆者のメモにあった漢語の慣用表現は以下の通りである。

傍目八目 (2006) 手前味噌 (2014) 他力本願 (2018)

自転車操業 (2019) 井戸端会議 (2020)

意味の推測がうまいいかない場合には、まず字義をヒントに推測しても正解に辿り着けないときがある。「効果観面／右往左往／大胆不敵／妄言多謝／笑止千万／十人十色／挙動不審」がそれである。また、「玉碎瓦全／自転車操業」のような比喻が含意されるものや、「手前味噌／風林火山」のような文化的な要素が含まれるものも意味の推測に支障を来たす場合がある。後述するように、これらは和語のそれにおいても同じことが言える。

### b. 和語

和語の慣用表現を目にした場合も意味の推測がうまいいかないものが多い。学習メモを確認すると、まず慣用表現に未習要素が含まれていると意味の推測に支障を来たす場合があると推察される。

語 関の山 (2006)

フレーズ 地団駄を踏む (2015) 一端のことを言う (2019) 肩透かしを食らう (2019) 賢しらをする (2019) 溜飲を下げる (2019) 大見得を切る (2020)

慣用句 彩ずる仏の鼻を欠く (2019)

これに対し、特に未習要素がなくても、即ち既習要素の集合体の慣用表現であっても意味の推測ができないものが多く存在する。

語 二つ返事 (2006) 猫可愛がり (2014) 火の車 (2014、2019 : 2 回) 燻し銀 (2016)  
どんぶり勘定 (2016) 一味の雨 (2017) 玉虫色 (2017) 玉虫色の判断 (2020) 馬鹿の  
一つ覚え (2020)

フレーズ お縄を頂戴する (2014) 等閑にならない (2014) 山を張る (2014) 塩を吹く  
(2016) 人後に落ちない (2018) 味噌をつける (2018) 顎で使う (2019) 大目玉を食  
らう (2019) トイレが近い (2019)<sup>7</sup> 料金を踏み倒す (2019) ヘそを曲げる (2019) 減  
らず口を叩く (2019) 耳が遠い (2019) お冠になる (2020) お眼鏡に叶う (2020)

定型句 一見さんお断り (2016) 借金のカタ (に捨てられる) (2016) 生まれてこの方 (2018)  
舐めてかかる (2018) 人となり (2018) 腰掛のつもり (2019) 取りも直さず (2019) 盗  
人猛々しい (2019) 目をさらにする (2019) もってのほか (2019) としたことが (2020)

慣用句 金の草鞋 (で尋ねる) (2006) 生き馬の目を盗む (2018) 高みの見物 (2018) 犬  
も歩けば棒にあたる (2019) 捕らぬ狸の皮算用 (2019) 団栗の背比べ (2019) 憎まれっ  
子世に憚る (2019) 瓢箪から駒が出る (2020) 元鞘 (元の鞘に収まる、2020)

中国語由来の和語、即ち日中同根の和語の慣用表現が中国語母語話者にとって理解に難くないこ  
とは 1-1 節で述べた通りである。一方、日中同根とは認められない和語については、「字義で理解  
不能」「比喻」「文化的要素」の 3 つに分けられる。

たとえば、字義で理解不能なものとして「旅は道連れ世は情け／寄らば切らん<sup>8</sup>／怪我の功名／住  
めば都／勝てば官軍 (負ければ賊軍)」などが挙げられる。

そして、比喻を共感できず<sup>9</sup>、意味がピンとこないものに「油を売る／虫がいい／板につく／寝耳  
に水／鬼に金棒／犬も食わない／犬も歩けば棒にあたる／豚に真珠／鳥の行水／馬の耳に念仏／猫  
に小判／お山の大将／地獄で仏／身から出た錆／目糞鼻糞を笑う／二階から目薬／後ろ暗ければ尻  
餅つく／餅は餅屋／据え膳食わぬは男の恥／正直者が馬鹿を見る／歯に衣着せぬ／雨降って地固ま  
る／大山鳴動して鼠一匹／実るほど頭を垂れる稲穂かな」など多数存在する。

これに対し、「清水の舞台から飛び降りる」に代表されるように、地理や歴史などの文化的要素を  
伴う慣用表現は学習者にとって意味の推測が特に難しいであろう<sup>10</sup>。学習メモにも以下の例が確認さ  
れる。

定型句 いの一番 (2006) おあとがよろしいようで (2020)

慣用句 灯台下暗し (2019)

文化的要素については「棚から牡丹餅／味噌をつける／帯に短し襷に長し／河童の川流れ／屁の  
河童／馬子にも衣装／瓢箪から駒が出る／敵に塩を送る／重箱の隅をつつく」などを考えても推測  
が難しいことが納得できる。

<sup>7</sup> 某日本語能力試験 N1 合格者の直話による。「耳が遠い」も同じである。

<sup>8</sup> 古典語要素が含まれている。

<sup>9</sup> 「足の裏の米粒」のような説明されれば共感できるが、少し説明を要するものもある。

<sup>10</sup> 同じ意味でも「猿も木から落ちる」は比喻型で、「弘法も筆の誤り」は文化的要素が含まれるタイプとなる。

## 2-2 産出面

以下、慣用表現の産出について「読めない」と「使えない」の2点から概観する。語やフレーズ、定型句などの慣用表現を覚え、発話などに使用することを産出と見なすが、無論学習者には慣用表現を使わないという選択もある<sup>11</sup>。

### 2-2-1 読めない

#### a. 漢語

中国語母語話者が漢語の意味を一見して理解または推測できることが、かえって日本語の漢語の読みを疎かにしまう場合がある(劉 2022b)。漢語の慣用表現に関する学習メモの例を確認すると、中国語を母語とする筆者が漢語の慣用表現を読めなかったことにはさまざまな理由や背景があったことが推察される。

##### (1) 【知らない読みが含まれる場合】

榮枯盛衰(2006) 徒手空拳(2006) 効果颯面(2018) 魑魅魍魎(2018) 非難囂々(2019)  
不撓不屈(2019)

以上の慣用表現のうち、当時その読みがわからなかった漢字が含まれている(下線部)。たとえば、「榮枯盛衰」の「枯」という文字に対し、筆者は訓読みの「かれる」を習得していたが、ここで必要となる音読みを知らなかった。

##### (2) 【既習の読みを用いては正しい読みにならない場合】

大言壯語(2006) 面目躍如(2006, 2015) 盛者必衰(2008, 2015) 諸行無常(2008) 一言一句(2014) 言語道断(2014) 準備万端(2014) 捲土重来(2017)

既習の(音)読み知識を利用しても正しい読みにならない場合も少なくない。たとえば、「捲土重来」に対し、筆者は既習知識の「じゅう」をあてたが、正しく「けんどうらい」でなければならない。

##### (3) 【特殊拍の箇所て読みを間違える場合】

威風堂々(2006 \*いふうどうどう) 七難八苦(2006 \*しなん はちく)

慣用表現に限らず、ほかの中国語母語話者と同様、特殊拍にまつわる誤用が見られた。実際に「いふうどうどう」「しちなんはちく」でよかったところ、促音を過剰に入れたり、促音が抜けたりする間違いを犯していた。

##### (4) 【ほかの言葉を連想し、それにつられて読みを間違える場合】

有耶無耶(2006 \*あやふや)

螢雪の功(2017 \*こうせつのこう)

「うやむや」が漢字表記の場合、筆者は「無」を目にしながら、類義語の「不」につられ、「\*あやふや」と発話してしまった。これに対し、「けいせつのこう」の場合、螢光ペンのケイを思い出し

<sup>11</sup> 「そもそも知らない」と「知っているが、使わない」の2タイプがある。



ながら、光の読み「コウ」につられて上記の読みとなった経緯である。

(5) 【ピンインの影響を受けて読みを間違える場合】

自由奔放 (2014 \*じゆうふんぼう ben) 玉石同碎 (2015、2018 \*ぎよくさいどうすい sui) 玉碎瓦全 (2018 \*ぎよくさいわぜん wa) 毀誉褒貶 (2019 \*きよほうべん bian)  
ピンインとは中国語の表音システムで、アルファベットで表記される。過去を思い出した2018の「玉碎瓦全」を例に説明しよう。「瓦」という文字はピンインで表記すると「wa」となる。それが影響して「が」ではなく、「わ」と発音してしまった。

b. 和語

これに対し、和語の慣用表現として以下のような例があった。

フレーズ 地団駄を踏む (2015 \*じたんだ) ～に与しない (2018)

定型句 歯牙にもかけない (2020 \*はが)

「地団駄」や、「くみしない」のような未習語のほか、「しが」を「はが」のように音読み訓読みの混同が理由として考えられる。「腹八分」を「\*はらはちぶん」と発話してしまったこともあったが、自らもっていた既存の音読み知識を援用して失敗した例である。また、「郷に入っては郷に従え」のような古典日本語の知識を要するものもある。

2-2-2 使えない

a. 漢語

このように漢語の慣用表現の中で中国語のそれと部分一致しながら、ずれを有するものが多い。中国語をそのまま意識しては日本語のそれを正しく産出できないのであろう。学習メモには以下のようなものを確認することができる。

用意周到 (2014 周到的准备) 支離滅裂 (2015 支离破碎) 悠々自適 (2018 自由自在)  
杞憂 (2019 杞人忧天) 良妻賢母 (2020 贤妻良母)

中でも略された形の「杞憂 (杞人忧天)」は意識的に覚えなければ自発的な使用は難しい。同じタイプとしてこのほか「蛇足 (画蛇添足)」も挙げられる。

b. 和語

和語の慣用表現として、日本語そのものとして知っておかなければ当然産出することが難しい。フレーズなどを慣用表現として見なした場合、産出難の和語として注目しなければならないものが極めて多い。以下、学習メモにあったものを挙げておく。

フレーズ ヤジを飛ばす (2004) ～に肖る (2006) 夢にうなされる (2006) 人を動かす (2009) 危機感を覚える (2009) 足止めを食らう (2014) 気に掛ける (2014) 鼻が利く (2014) 袋叩きに遭う (2014) 匙を投げる (2015) ～に親しまれる (2016) ～に負えない (2018) ～に忍びない (2018) 無駄口をたたく (2019)

定型句 結果はどうであれ (2004) 顔に泥を塗る (2014) 持って回る (2014) 甘く溶け

るような (2015) 緊張して頭が真っ白 (2015) 途中まで一緒に行こう (2015) 酔って目が回る (2015) 選り取り見取り (2015) 選りによって (2015) 有無を言わず (2016) 飛ぶ鳥を落とす勢い (2019) 見よう見真似 (2019) 向き不向き (2019) ～を出汁にして～ (2019) 嫌な言い方をすると (2020) こっちのセリフ (2020)

また、和語の慣用表現であっても中国語由来のものが少なくない。たとえば、「水を得た魚のよう／郷に入っては郷に従え」などがそれである。日本語として産出する際に、一定の難しさを伴うことが以下の実例から推察される。

慣用句 病膏肓に入る (2015 病入膏肓) 来るものは拒まず去る者は追わず来る者は拒まず (2016 来者不拒) 藍より青し (藍より出でて藍より青し、2019 青出于藍而胜于藍) 井の中の蛙大海を知らず (2019 井底之蛙)

そして、中国語由来でありながら、省略形を用いるものもあった。

藪蛇 (藪をつついて蛇を出す、2019 打草惊蛇) 類友 (類は友を呼ぶ、2019 物以類聚)

一方、非中国語由来の和語慣用表現については、文字通りに意味は理解できるが、一定の文字数が要求される「下手な鉄砲も数撃ちゃあたる／金の切れ目が縁の切れ目／馬鹿は死ななければ治らない」は学習者による能動的な産出は難しいと予想される。また、比喻型の「袋のネズミ／金のなる木／鷹は鷹を生む」や、文化的要素が含まれる「村八分／内弁慶」なども当然のことながら、レベルの高い学習者にとっても使いこなすのは容易ではない。

### 3. 中国語の慣用表現の影響を受けての日本語の産出について

#### 3-1 日中両言語における「慣用表現」

王 (2013) で示された図 1 を確認しても、本稿でいう「慣用表現」に関連する両言語における術語が種々雑多で、その対応関係が一様に定め難いことがわかる。

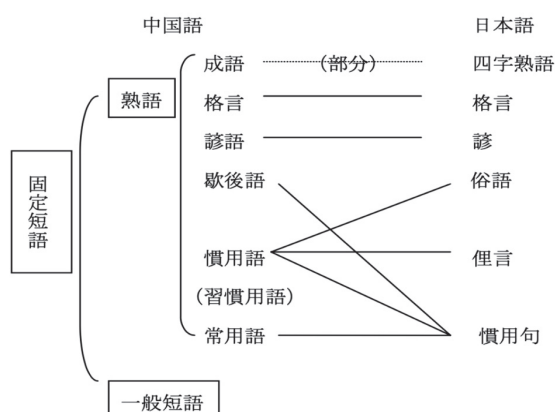


図 1 日中両言語における慣用表現に関する術語の対応関係 (王 2013 : 25)

### 3-2 中国語の慣用表現の影響を受けての日本語産出の問題点

慣用表現の特色として「効率的に表現できること」「インパクトが大きいこと」「ぴったりのイメージとニュアンスを表すこと」の3つが挙げられよう。

中国語における「慣用表現」の使用頻度は日本語のそれに比べ、圧倒的に高い<sup>12</sup>。たとえば、「頻繁に」という副詞をとっても、中国語では“三天两头”のような四字熟語が用いられる。日本語では「約束」の二文字で済まされるところを、中国語では“約法三章”のようにやはり四字熟語が多用される。「我先に」も中国語では“争先恐后”のように「先を争う」「後ろを恐れる」と同じ構成の二字漢語が合わさって四字熟語が用いられている。そして、書き言葉や改まった場面に限定されることなく、日常会話の場面でも慣用表現が多用されるという中国語の特徴が認められる(張2012)。中国語の日常会話で慣用表現しか使わない、またはそのニュアンスは慣用表現でしか表せない場合がある(吃不到葡萄说葡萄酸(一緒に葡萄を食べさせてもらえないから、その葡萄が酸っぱいから要らないと強がる→自分のものにならないものを悪く言う/妬み嫉み)<sup>13</sup>/狗改不了吃屎(犬はいくら躰をされても排泄物を舐めることをやめない→全く反省していない)/烂泥扶不上墙(質のよくない泥を壁に塗ってもくっ付かない→素質のない者にはいくら教えようとしてもどうにもならない)/狗眼看人低(犬は飼い主にはしっぽを振るのに、乞食を見て吠えるのと同様、人を見下す→人を見て自分より下だと思ふ人を見下す))。こうした場合において、学習者が中国語の慣用表現を訳せなかったり、頑張って直訳または言い換えて訳しても伝わらなかったりするという実態が、これまでの研究で見過ごされてきた<sup>14</sup>。大きくは「訳せない場合」と「直訳または言い換えて伝わらない場合」とに分けられる。

#### 3-2-1 訳せない場合(日本語の言い方を知らない場合)

学習メモには、「訳せないもの」として以下の語が見られた。ここでいう「訳せない」とは、“天壤”“摇钱树”“参差”のような中国語の慣用表現またはその一部の日本語の言い方がそもそもわからず、日本語にできないということである。

漢語 雲泥の差 (2019 天壤之别)

和語 金の成る木 (2016 摇钱树) ピンからキリまで (2019 参差不齐)

中国特有のもの(ex.「瓮中捉鳖(袋のネズミ)」)や、概念(ex.「故弄玄虚(いろいろな手を使って人を煙に巻く、簡単なことをことさら難しく見せる)」)などが含まれる慣用表現が特に訳しにくい。また、「人来疯(思いつき)/暴发户(成り金)/铁公鸡(どケチ)/耳边风(聞き流す)/对鸡眼(寄り目)/受委屈(泣き寝入りなどで悔しいまたはつらい思いをする)」のような3文字の慣用表現に訳せないものが多い。

<sup>12</sup> 牛(2021)は映画の字幕を用いてこの点を検証した。

<sup>13</sup> 矢印の前は筆者による直訳または意訳。これに対し、矢印の後ろは日本語らしい日本語訳であるが、日本語に対する慣用表現の有無は問わない。

<sup>14</sup> 学習者しか知り得ないポイントであることに加え、研究手法が確立されていないことも研究が全く進められていない原因であると思われる。

### 3-2-2 直訳または言い換えで伝わらない場合

「直訳または言い換えで伝わらない場合」はさらに「正しい日本語を産出できない」「日本語らしい日本語にならない場合」の2つに分けられる。

#### 3-2-2-1 正しい日本語を産出できない場合

大学時代の同級生が会話の練習の中で「一人っ子政策」を取り上げようとしたが、中国語の「計画生育」をそのまま音読みにしていたことを懐かしく思う。筆者自身中国語の“悪性循環”をそのまま日本語にして発話したことがあった<sup>15</sup>。正しい日本語を示せば「悪循環」または「負の連鎖／負のサイクル／負のスパイラル」となる。

悪循環（2014 ＊悪性循環）

もう1例を挙げる。日本語にも「僥倖」という語はあるが、使用されることが少ない。中国語の“侥幸心理”をそのまま音読みにして発話しても自然な日本語にはならない。「行きあたりばったり／一か八かの姿勢／運任せ」といった言い方を覚える必要がある。

このように、「正しい日本語を産出できない場合」は、中国語をそのまま音読みにした場合に多く見受けられるが、慣用表現に限らない。従来の研究でよく言われる中国語による負の転移の1つであるが、慣用表現に特化した考察はなされていない。

#### 3-2-2-2 日本語らしい日本語にならない場合

筆者の学習メモには注目されるべき以下の2例がある。

大人気ない（2015、「有失身份」）

現実から目をそらす（2019、＊自分で自分を欺く、「自欺欺人」）

筆者が会話の中で、中国語の“有失身份”と“自欺欺人”のニュアンスを表そうとしてそれぞれ「身分を失ってしまう」と「自分で自分を欺く」と日本語母語話者に伝えたものの、ポカーンとされた実体験である。筆者の中では文法的な誤用のない訳し方を用いたつもりであったが、会話の前後に文脈があっても日本語母語話者には意味が通じなかったというコミュニケーション上の大きな事故であったとも言える。日本語らしい日本語としてそれぞれ「大人気ない」と「現実から目をそらす」となる。前者は語レベルの対応で解決できるのに対し、後者は日本語らしさを有する訳し方（説明）が求められる。もう少し用例を追加して説明しよう。たとえば、“长眼了”“恶人先告状”を「目がちゃんとついているか」「悪者が先に訴えを起こす」と訳しても日本語母語話者に伝わらない。「お前の目は節穴か」「訴えたもん勝ち」のように「節穴」「～もの勝ち」のような語を習得していることが前提条件である。これに対し、日本語母語話者に理解してもらうためには、「狗改不了吃屎」についても「犬はいくら糞をされても排泄物を舐めることをやめない」と直訳するのではなく、「馬鹿に付ける薬はない」「馬鹿は死ななければ治らない」、ひいては「全く反省していない」「学習能力がない」のように日本語らしい訳にすることが重要である。

<sup>15</sup> 4 文字であるが、慣用表現とされない「脂性肌（2019、＊油性皮膚）／肉体労働（2018、＊体力労働）」のようなものもあった。

そもそも中国語の慣用表現は概ね「説明型」と「比喩型」に二分できる<sup>16</sup>。そこにさらに文化的な要素が絡む場合がある。前者は文字通りの意義が重要で、そして後者は比喩や文化などに注目する必要がある。以下、「字義」「比喩」「文化」などの観点から概観する。

#### a. 字義<sup>17</sup>

文字通りに訳すだけで意味が伝わる場合も当然ある。たとえば、日中同根の場合である。たとえば、「五十歩を歩いた人が百歩を歩いた人のことを嘲笑う」と言えば、日本語にも中国語由来の「五十歩百歩」があるため、全く問題にならない。このほか、“火上加油（火に油を注ぐ）／如魚得水（水を得た魚のよう）／井底之蛙（井の中の蛙大海を知らず）／恩將仇報（恩を仇で返す）”なども挙げられる。また、“积少成多”のような説明型のタイプも「少しずつ集めていけば多くなる」のように訳しておけば、日本語の「塵も積もれば山となる」が想起されるため、意味が難なく通じる。“进退两难（進むのもバックするのも難しい→ジレンマに陥る／身動きが取れない）／知難而退（難しい状況にあることを理解して諦める→諦める）／省吃俭用（食べるのも使うのもできるだけ節約する→儉約）／轻而易举（軽く持ち上げられる→極めて簡単なこと）／遍体鳞伤（全身が傷だらけ→傷だらけ／満身創痍）／不懂装懂（知らないのにわかっているふりをする→知ったかぶり）／一摸一样（全く同じ→瓜二つ）／见死不救（死にそうな状況を見過ごす→見殺しにする）／少年不努力老大徒伤悲（若いときに努力しないと大人になったら苦労する→若い頃の苦労は買ってでもしろ）／体无完肤（体にまともな皮膚が残っていない→傷だらけでひどい怪我している様／完膚なき様）／废寝忘食（寝るのも食べるのも忘れる→寝食を忘れる）／知己知彼百战百胜（相手のことをしっかり把握したうえで戦えば全勝する→己を知り敵を知るものは、百戦して危うからず）”のように、決して例が少ないわけではない。しかし、学習メモにあったような以下の例に関しては字義通りでは通じない可能性が高い。

寄らば大樹<sup>18</sup>（2019 大树底下好乘凉）

字義を忠実に日本語に訳した場合、たとえば「大きな木の下のほうが涼をとりやすい（涼をとるのに適している）」をいうだけでは日本語話者に理解してもらえない。ほかに“无病呻吟（病気でもないのにしんどそうにわめく→かまってちゃん）／装疯卖傻（わざとおかしいふりをする→とぼける）／水土不服（土地の水と土に合わないまたは慣れていない→馴染めていない）”を挙げることができるが、文字通りの情報だけではなく、そこから派生する中国語的な発想に対する説明が必要である<sup>19</sup>。

<sup>16</sup> 劉（近刊）を参照されたい。

<sup>17</sup> 派生義と比喩の連続性にも注意する必要がある。

<sup>18</sup> 「長い物に巻かれる」もある。

<sup>19</sup> 字義で通じかどうかについて中間的なものとして“强词夺理（強い口調で正しいのは自分側だと主張する→屁理屈で自分を正当化する）／得寸进尺（一寸をもらったらさらに尺を欲しがると強欲）／无理取闹（理由もなく、駄々をこねる→わがままを言う）／耍小脾气（不機嫌になる→すねる）／笑掉大牙（歯が取れるほど笑える話→呆れるほどおかしい話／臍で茶を沸かす）／一举一动（手などを挙げたり動かししたりするちょっとした動き→（相手の）動向のすべて）／忘恩负义（恩義を忘れる→恩知らず）／自作自受（自分でやったことのせいで悪い結果が自分に返って来る→自分で蒔いた種／自業自得）／以柔克刚（柔軟さが硬さを上回って勝→柔よく剛を制す／举手投足（手や足を挙げたりする→1つ1つの行動／一挙手一投足）”などが挙げられる。

## b. 比喻（発想）

慣用表現に比喻を伴うものが極めて多い。日中両言語における比喻の発想が異なっても、直訳を聞いてその例え方が共感できれば、学習者の言おうとする内容が伝わる場合も少なくない。たとえば、中国語の“矮个子里面挑个儿高的”を直訳した「高い人はいないから、背の小さい人を選ぶしかない」と言えば、日本語母語話者には「団栗の背比べ」が想起され、学習者の意図する意味が伝わる。“大海捞针（海の中で針を探す→大海に沈んだ針を探すように極めて難しい）／易如反掌（手のひらをひっくり返すようで極めて簡単→簡単すぎる）／不费吹灰之力（灰に息を吹きかけるくらい簡単→いたって簡単）”なども理解できるものであろう。しかし、中国語の慣用表現のうち、一定の説明を加えないと日本語母語話者に共感してもらえないものが多い。たとえば、日本語は「出る杭は打たれる」であるが、中国語では頭1つ飛び出ている鳥が狙われやすいという例え方をする。中国語的な発想に基づく比喻で、日本語母語話者が共通して共感できないものは、直訳または言い換えでは伝わらない可能性が高い。この点について学習メモに以下の例が見られる。両者はともに比喻型で日中両言語において対応のあるものを確認すれば一目瞭然である。

出る杭は打たれる（2015 枪打出头鸟）

鳶の子は鷹にならず（2019 鸡窝里飞不出凤凰）

ほかに“狗嘴里挑不出象牙（犬の口からは高価な象牙は出てくるわけがない→そのレベルの人間は所詮その程度の行動しか取れない）／唯恐天下不乱（天下が乱れないことを恐れ、天下が乱れるように画策する→裏でかき回そうとする／輪を乱そうとする）／小菜一碟（すぐ作れるおかずのように簡単なこと→簡単なこと）／打肿脸充胖子（顔をパンパンに叩いて腫れさせて自分は太っていると言い張る→見栄っ張り）／恨铁不成钢（期待した相手が、鉄がなかなか鋼にならないようで悔しい思いをする→期待外れ／期待するだけ無駄だった）”を例として挙げることができる<sup>20</sup>。

## c. 文化

以下の実例で示されるように、筆者は「噂をすれば（影が差す）」を知っておらず、絶妙なタイミングで話題の人物が現れる意を表す中国語“说曹操曹操到”を「曹操の話をしていたら、曹操が現れる」と直訳していたのである。曹操は言わずもがなの『三国志』に登場する有名な人物である。日本でも全く馴染みがないというわけではない。

噂をすれば影が差す（2019 说曹操曹操到）

中国の文化的要素の含まれる慣用表現をそのまま直訳または言い換えて日本語を産出しても往々にして日本語母語話者に伝わらない場合がほとんどである。たとえば、「陪太子读书（皇太子に付き

<sup>20</sup> 比喻関連で通じるかどうかについて中間的なものとして“拔苗助长（苗を引っ張って少し成長を助けようとする→良かれと思ってやったことが悪い結果を招く）／翅膀硬了（翼が固くなった→言うことを聞かなくなる）／骑虎难下（虎に一度乗ってしまったらなかなか降りられなくなる→引くに引けない／抜け出せない／乗り掛かった舟／雨过天晴（雨が止んで晴れる→台風一過）／雷声大雨点小（雷の音はすごかったが、雨は大したことにはなかった→見かけ倒し）／船到桥头自然直（船が埠頭に着くと自然と真っ直ぐになる→何事も最終的になんとかなる／案ずるより産むが易し）／螳螂捕蝉黄雀在后（蝉を捕まえようとする螳螂が自分の後ろに雀がいることに気づかない→目先のことにだけ囚われず背後にも用心しろ）／姜还是老的辣（生姜は古い方が辛い→さすがベテラン／年の功）／以牙还牙（歯は歯で返す→目には目を、歯には歯を）”などが挙げられる。



添って一緒に勉強するだけの立場→参加賞)／皇帝不急太監急(皇帝はのんびりしているが、宦官は焦りまくっている→周りが気をもんでいるのに当事者はそうじゃない)／鸡窝里飞不出凤凰(鶏の巣から鳳凰が飛び出るはずがない→トンビは鷹を生まない／蛙の子は蛙)／班门弄斧(魯班というこの手の名人の前で斧を見せびらかす→身の程知らず)／临时抱佛脚(試験などの直前で仏の足に抱きついてお祈りする→苦しいときの神頼み)／泥菩萨过江自身难保(泥で作られた菩薩像が川を渡るようで自分のことも守れない→人のことを心配している場合じゃない)／只许官兵防火不让百姓点灯(官の兵士は放火しても許されるが、百姓は明かりを灯すのも禁ずる→他人に厳しく、自分に甘い)／占着茅坑不拉屎(用を足すのでもなく、トイレの一室に入って出て来ない→能力もなく、仕事もせず、ただポストに着いたまま後進に譲らない)」が挙げられる。これらは次節で提案する訳し方で対応する必要がある。

### 3-3 提案

直訳または意識で意味が伝わらないことは、日本語に対応する慣用表現の有無とは直結しない。たとえば、「欲速則不达」は日本語の「急がば回れ」に相当するが、これを知らない学習者もいる。その場合、学習者は直訳または意識するという方法しかない。直訳では「速さを欲すれば目的を達成することができない」というような訳になるが、日本語母語話者には辛うじて理解してもらえよう。日本語としては「急いで(性急に)事を運ぼうとすればかえって失敗する(急いては事を仕損ずる)」や「焦りは禁物」などのほうが自然であろう。こうした日本語母語話者に伝わるような訳をつけられるようになるために、筆者からは以下の2つの訳し方を提案したい。

#### i 提案その1

字義通り、そして比喻などを共感できそうな中国語の慣用表現に関しては、「これは～ように」と説明を加えたあと、実際の意味(論す内容など)をつけ加えるという訳し方が考えられる。たとえば、中国語の“以卵击石”を意識しながら日本語を産出する場合、「(弱い我々が強敵の相手に挑むのはまるで)生卵をそのまま石にぶつけるようなもので、つまり、全く相手にならないという意味。」のように言えば、中国語母語話者が言おうとするニュアンスを踏まえたうえでの日本語となる。

これに対し、中国語的な比喻や文化が含まれる慣用表現については、「中国語には“…”という言い方があります。」と最初に断り、それを少し噛み砕いて説明したうえで、「意味は～ということです。」と括る必要がある。たとえば、「中国語には“笨鸟先飞”という言い方があります。“笨鸟”は頭の悪い鳥の意味ですが、言葉全体として生まれながら運動神経のない小鳥は自ら早めに飛ぶ練習をするのが重要だという意味です。」と面接でこうした中国語の慣用表現を引用しながら説明すれば、相手に伝わらないことを防ぐだけでなく、自分自身はコツコツ頑張るタイプだと印象に残るアピールもできよう。この訳し方は特に文化が絡むような慣用表現に関して効果的である。

#### ii 提案その2

訳せない要素または訳しにくい要素が含まれる中国語の慣用表現も多い。その場合、思い切った

発想転換が求められる。たとえば、「绘声绘色」を直訳した「声を書く、色を書く」を用いても日本語母語話者にはピンとこない。「いきいきと」の語訳または「まるでその場にいたような臨場感」のような意識が求められる。もう1例を挙げよう。「一敗涂地」については文字通りに「一敗地にまみれる」ではなく、思い切って「ボロ負けを喫す／相手の圧勝」に言い換えればよい。

#### 4. 結びにかえて

本稿は、筆者自身の学習メモを手がかりに慣用表現の学習について考察を行った。その結果、日本語の慣用表現の学習に多くの問題点があることがわかった。中国語母語話者が日本語の慣用表現を学習する際に、読みに注意すると同時に、「字義」「比喻」「文化」などの要素を意識しながら勉強する必要がある。また、従来の研究では触れられてこなかったが、中国語の慣用句は使用場面の多さと使用頻度の高さのどちらも日本語のそれに圧倒するものであるため、中国語母語話者は中国語の慣用表現の影響を受けて、それを直訳または意識するというストラテジーを用いる。しかし、往々にしてその訳がうまく日本語母語話者に伝わらないというコミュニケーション上の「支障」を来すことがある。この点を克服するために、筆者は学習の経験者の視点から2つのモデルを提案した。ただし、根本的にこの問題を解決するには、学習者自身の語学力のレベルアップは必須で、うまく伝わらないというモヤモヤ感を感じた場合は、その場で表現したい言葉を噛み砕いて説明を行い、日本語母語話者に日本語ではどのように言うかについて一つ一つ確認を重ねていく作業が重要である。

#### 参考文献

- 今井俊彦 (2014) 「ことわざ・慣用句」 沖森卓也・蘇紅編『中国語と日本語』朝倉書店
- 王倩 (2016) 「漢日口译中汉语非成语四字词的口译技巧」『言語と文化』28、立教大学
- 王天予 (2010) 「日本語慣用句の研究現状と課題—日本国内の研究と中国での研究を中心に」『言語教育研究』10、拓殖大学大学院
- 王天予 (2013) 『中国人学習者による日本語慣用表現の理解に関する考察—身体部位詞と形容詞からなる慣用表現を対象に一』拓殖大学大学院博士学位申請論文
- 北澤尚・李琳 (2019) 「四字熟語の連体修飾における「～ナ」「～ノ」の使用実態」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系 I』70、東京学芸大学
- 国広哲弥 (1985) 「(特集 慣用句) 慣用句論」『日本語学』4-1、明治書院
- 朱京偉 (2015) 「四字漢語の語構成パターンの変遷」『日本語の研究』11-2、日本語学会
- 蘇振軍 (2018) 「日本語母語話者と学習者による定式表現の産出過程の研究」『広島大学大学院教育学研究科紀要 (第二部)』67、広島大学大学院教育学研究科
- 蘇振軍・畑佐由紀子 (2018) 「日本語定式表現の処理過程の研究—日本語母語話者と日本語学習者の比較をもとに一」『第二言語としての日本語の習得研究』21、凡人社
- 張淑倩 (2008) 「台湾ドラマ『流星花園』に見る現代中国語表現」『湘北紀要』29、湘北短期大学
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干涉 20 例—』スリーエーネット



## ワーク

- 土屋智行 (2020) 『言語と慣習性—ことわざ・慣用表現とその拡張用法の実態—』 ひつじ書房
- 陳力衛 (2006) 『日本の諺・中国の諺—両国の文化の違いを知る—』 明治書院
- 牛雨薇 (2021) 「日中両言語における四字熟語の使用頻度に関する一考察— 欧米文学作品の日中訳本を手掛かりに—」 『日本アジア研究』 18、埼玉大学大学院人文社会科学研究科
- 野村雅昭 (1975) 「四字漢語の構造」 国立国語研究所 『電子計算機による国語研究Ⅲ』 秀英出版
- 宮地裕編 (1982) 『慣用句の意味と用法』 明治書院
- 宮地裕 (1985) 「(特集 慣用句) 慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語—」 『日本語学』 4-1、明治書院
- 楊華 (2015) 「中国語教育における常用四字格の学習—日本語の四字漢語との対照を通して—」 『コミュニケーション』 4、同志社大学グローバル・コミュニケーション学会
- 劉志偉 (2022a) 「中国語話者上級学習者から見た漢字を伴う和語学習の難点について—日本語学習メモを手がかりに—」 『JSL 漢字学習研究会誌』 14、JSL 漢字学習研究会
- 劉志偉 (2022b) 「中国語話者は「漢字語彙」が読めない—音読みの語をひとまず取り上げて—」 『中国語話者のための日本語教育研究』 13、中国語話者のための日本語教育研究会
- 劉志偉 (近刊) 「対照研究」 庵功雄編 『学習者の気持ちが変わる日本語教育入門』 ひつじ書房

## 付記

論文執筆にあたって中嶋徹氏に大変お世話になった。ここに記して御礼を申し上げる。

なお、本稿は公益財団法人日本漢字能力検定協会 2021 年度漢字・日本語教育研究助成「中国語を母語とする上級以上の学習者にとって必要な「漢字語彙」とは何か—学習メモを手がかりに—」(研究代表者 劉志偉) による研究成果の一部である。